

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10

本郷瀬川ビル 〒113-0033

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI 098

20.MARCH
2009

特集 「まちづくり会議 in 鶴岡」

●「まちづくり会議 in 鶴岡」

1. 実を重んじぶれない町 鶴岡 1
2. まちづくり会議 in 鶴岡の残したもの ... 3
3. 発表会+JUDI 賞 報告 6
4. 会議に参加して 7
5. 全体の紹介 10

●事務局より 12

発行者: 都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

「まちづくり会議 in 鶴岡」特集

特集 1

実を重んじぶれない町 鶴岡

高見 公雄

TAKAMI KIMIO

(株)日本都市総合研究所

1 景観形成モデル都市の1期生、 されど条例制定は2008年

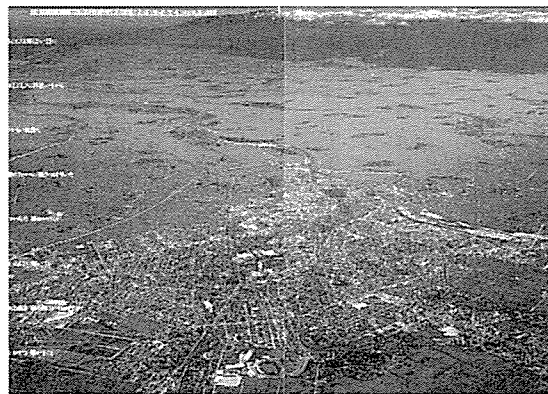
城址復元の取り組みの一環でもあった鶴岡タウンキャンパスに立地する東北公益文科大学の発案により、都市環境デザイン会議による鶴岡キャラバンが実施されたことは感慨深い。私は建設省(当時)の重点施策であった景観形成モデル都市指定に基づき、1987(昭和62)年に景観ガイドプラン作成のため鶴岡市を訪れて以来、全市の計画からいくつかの地区の計画まで、複数のプロジェクトに参加させて頂いてきた。

鶴岡市は景観形成について、早期から問題意識を持ち取り組んだ自治体であるが、モデル都市のガイドプランにも位置づけられている景観条例の制定は、2008(平成20)年まで待つことになった(大規模建築物に関する条例は2005年)。それはなぜか。これがこの町の特徴、魅力を表している。ガイドプラン作成の後、1990年過ぎには条例制定の検討が始められ、その一部を手伝った記憶がある。それが制定まで20年近くを要した理由は、「実のないものをつくっても意味がない」といった市内の統一した意識であった。

景観形成ガイドプランの作成においては、市役所内の分野横断的に30歳前後の職員を集めた庁内部会なる場が設けられ、市の景観資源、地域の気質、目指すべきもの等について、本当に実のある議論が進められた。その実行計画としての条例制定への道程は、形を優先せず、実を先行させるといった庁内の、さらには多分市民の意志であった。鶴岡市の景観形成への取り組みは、この庁内部会の存在が大きい。彼らは20年を経て庁内の主要ポストを占めている。景観について議論した記憶に基づき、それぞれ教育、広報、企画、建設、農林など各部署で20年間行政に携わってきた当時のメンバーを軸に、景観形成は市に定着していき、後進を育ててきた。

2 優良農地に守られてきた自然景観、 「城下町」につける市街地

藩政期に徳川四天王の一角を占めた酒井家17万石の城下町である鶴岡は、合併により鶴岡市の一部となった天領大山とともに、わが国有数の美田を誇る地域である。強い北西からの季節風で雪が下から降ると言われる庄内の自然の中、



平野部の美田と日本海沿いの砂丘上の畑作など、優良農地の存在がいたずらな市街地拡大を阻んできたことは、この町の景観面での財産である。実りの時期、稲穂が色づくと、鶴岡市街地はまさに黄金の海に浮かぶ緑の島となる。市街地と農地の境界がはっきりしていることが自然景観を引き立てている。

市街地は、城下町から若干拡大はしたものの、特に旧城下町の範囲は空間構成面等で良くその特徴を残している。空からみれば城を中心に緑深い住宅地が環状に存在していることが分かり、これは町を歩いていても実感できる。町割は基本的に城下町のままであり、江戸期の地図と現状を重ね合わせると面白いように一致する。

城下町の町割はお城と内川によって規定され、大手門から伸びる通りに架かる三雪橋は、月山、羽黒山と市内の金峯山の冠雪を眺められることにその名を由来する。そもそも江戸期の河川改修時に川の向きを合わせたのではないかとの説もある。お城の北側一帯に広がる家中新町は、中級武士の居住地として造られ、現在も武家屋敷町の面影を残す。特に地区景観ガイドプランで指摘された地区に固有の板塀は、保全されかつ新設される傾向にあり、その面影はより色濃いものとなりつつある。以上のように、市街地はその構成、景観資源など城下町ということにつけるものである。

3 心を大切に、ぶれず、大胆に

以上のように書いていくと、鶴岡を訪れたことのない方は素晴らしく雰囲気のある美しい町ではないかと想像されるだろうが、現地に行くと目に入る景色は、そういった期待に応えるものではない。町割は城下町を残し、一部地区に雰囲気が色濃くあるというものの、その他の地区は一般的な地方都市の街並みであるし、雪への対策から融雪装置により道路には赤錆びがひろがり、家屋は雪対策等を景観面よりも優先させている。そんな中、鶴岡の人々は表面的な見え方よりも、美田、城下町といった市の特徴を活かし、伸ばしていこうとする言わば根本的な部分から取り組もうとした。

近年目を見張るのは、一層の市街地拡大を抑えることを目的に2004（平成16）年に新設した区域区分（市街化区域と市街化調整区域の区分）、2004年に指定された市街地全域を対象とした都市計画高度地区の決定、市街地中心部での市立庄内病院の建替え、東北公益文科大学大学院の城址内設置等である。周知の通り、区域区分については人口増加による市街地拡大圧力の低下等を背景として、2000年の都市計画法改正により、地方部においてはその適用は地域の判断に任せられ、一部の中核都市等では区域区分を廃止する等の流れにある中での新規導入である。

流行りのようなことに流されず、自分たちの町は何をすべきかを考え、そして実行する、これが鶴岡の強さである。最高高さ制限は、城下町の雰囲気をまもり、鶴岡に高層建物はいらない、という強い意志であり商業地域においても高さ制限を15mとした。既存不的確なマンション等が数棟発生したが、そういったことには揺るがない。

土地値用面での市立病院の建替え、大学立地を中心市街地で展開している取り組みなども類似のものがある。都市機能の拡散を防ぐためには、市が行う公益機能の立地について、資金をかけてでも、また制度面での困難を乗り越え、中心市街地内立地を実現した。明らかに最高高さ制限を超えることとなる市立庄内病院の建替えと高さ制限を同時期に進めるといったやや自己矛盾を含む対応も、何をすべきかがはっきりしているのでこれも揺るがない。

4 形（ビジュアル）はまだまだの面もあるがきっと将来は

これらにより、鶴岡市街地の将来像は行動をもって示されたものだと思う。既述の通り現段階で、都市景観、アーバンデザインという面で特に秀でている訳ではないが、このようなぶれない、また目標を明確にして、形より実を大切にする気質で取り組んでいくことで、将来、この町は必ず特徴と魅力あるものになるのだと思う。鶴岡のまちづくり、アーバンデザイン面での特徴はこれらのことに言い表せると考えている。なお、文中であまり触れていないが、鶴岡公園となっている城址の濠やその周辺、中心部に点在する木造の様式建築、日本最古と言われる藩校など、観光要素となる資源は良く保存され愛されているが、こういったモノの評価は鶴岡を語る一部にすぎないと思うのである。

まちづくり会議 in 鶴岡の残したもの —地元からの報告

高谷 時彦

TAKATANI TOKIHIKO
東北公益文科大学大学院

多くの方々の参加を得て、「まちづくり会議 in 鶴岡」を成功裏に終えることができました。

遠くからはるばるお越しいただいた方々、裏方として会議を支えてくれた地元の方々など大変多くの方々のお世話になりました。この場を借りてあらためてお礼申し上げます。

現在東北公益文科大学の院生を編集員として、鶴岡市とも共同で会議の内容を報告集としてまとめる作業を行っています。適宜注釈やコメントをつけ今後のまちづくりに活用される分かりやすく利用価値のある資料となるよう心がけています。この後、順次 JUDI の皆さんのコメントを加えていただく予定です。また関東ブロックの屋代さんが中心となり鶴岡市に対する提言もまとめていただいているということなので大変楽しみにしています。

以上のように会議の全貌の紹介はこれから出る報告書に任せるとします。ここでは今回の会議を鶴岡側の目で振り返ってみた感想など述べたいと思います。

風土からの発想・新しい都市計画への視点—基調講演—

まずは冒頭の「空間の質を問うまちづくり」についての土田氏の講演です。

2 つの視点から私たちがまちづくりを考えるヒントが示されたように思います。ひとつは庄内の独自性、地域の風土性へのこだわりが大事だという点です。北前舟に代表される日本海文化圏という視点から地域をとらえること、また米の単作地帯の風景の豊かさを自ら認識することの必要性など御自身の幼年時の体験も交えての話でした。また東京中心のシステムに組み込まれる限り地理的、歴史的なハンディを背負うということも強調されました。首都圏からの U ターンや I ターンにも期待するなというのは、交流人口の拡大を目指すわれわれにとってはちょっと厳しい指摘です。しかし自立する気概を持つことこそが必要であり首都圏や他の地域に対する期待感を持ちすぎはいけないという土田先生らしい直言だと思います。

またもうひとつの視点は都市計画が直面する現代的な課題の枠組みの中で地域の問題も考えなければならないということでした。土田氏は地方都市を考える枠組みとして都市の構え・形態論、中心市街地論（勿論郊外論でもあります）、公共空間論の3つのテーマを提示されました。

私としては、とくに最初のテーマである都市の構え・形態論に興味を惹かれました。日本海側の港も風格ある独自の形態と構えを持っていたという話から都市形態論への展開を期待しましたが、その話はまた後日とあっさり片付けられてしまったので、少々不完全燃焼感が残っています。また後日ご意見を伺いたいものです。

人口減少、成熟の時代の都市計画の再構築は地域、地方都市がリードするという形で進むに違いありません。地域の課題にこそ普遍化できる課題が潜んでいます。その課題と解決に向けての道筋を地域から発信していきたいと考えています。

公益ビジネスとしてのまちづくり鶴岡

引き続き行われたまちづくり会社鶴岡の事業報告とパネルディスカッションについてはかなり充実したレポートが報告書に記載される予定です。ここでは、ディスカッションのねらいに関して若干の補足をさせていただきます。

フロアの皆さんに、誤解を与えたかなと反省していることがあります。壇上に鶴岡型の都市計画をリードしてきた鶴岡市志田建設部長、まちづくり会社の実質的な提唱者、主導者である荘内銀行國井頭取が仲良く（二人は高校の同級生です）並んだので、今回組上にのせた株）まちづくり鶴岡が両者の周到な連携で生み出され、一体化に運営されようとしていると思われたかもしれません。もちろん両者は中心市街地活性化の計画を協力して行っていますし今後ともお互いを尊重した協力体制にあることはいうまでもありません。

しかし、私がコーディネーターとして発信しなかったのは、この両者が適切な距離をおき、不即不離の関係で歩もうとしていることです。

市のほうは志田部長を中心に15メートルの絶対高さ制限の中心部への導入、線引きの強化、都市機能の中心部への集中、古いお堀の再生と先端生命研究所や公益大大学院の誘致など独自の都市計画を推進し、自らの路線に自信を持ち全国的にも高い評価を得ていることは JUDI 代表パネリスト高見公男さんのご指摘のとおりです。まちづくり会社の設立に当たっても市として何か知恵を借りたい、あるいは行政サービス補完の担い手として期待するといったものではなかった様に思われます。

また株）まちづくり鶴岡にも行政サービスを補完するという発想はまったくありません。むしろ行政がまったく考え付かなかったことを民間的な発想でまた民間の資金力でやっつけようとしています。市民が必要としている社会サー

ビスを企業的なマインドで発見し、それをビジネス手法で持続的に行っていく組織なのです。パネリストの東北公益文科大渋川教授が提唱している「公益ビジネス」の実践者として、まちづくり鶴岡は位置づけられます。公益的な目標を追求するという点では従来のNPOと換わることはありませんが、活動方法としては、行政、補助金、基金、ボランティアなどに依存することなく独立企業としてビジネスを遂行するというスタイルをとっているのです。この点についてJUDIの皆さんと集中した議論を展開することを意図していましたが十分な時間が取れなかったことを反省しています。

話は飛びます。大統領就任演説でオバマ氏は、成功した金持ちにではなく意欲ある（経済的に恵まれない）人に機会を与えることの重要性を指摘しています。しかしその理由は決してチャリティ精神にあるのではなくそれが公益（Common Good）に至る最も確かなルートであるからだといっています。公益の実現のためにはチャリティ精神だけでなく、市場の力を活用する最も確かな方法を見つけ実践することが必要だといっているのです。

まちづくりという公益のために企業家精神でビジネス的な活動を行う株)まちづくり鶴岡の試みの先進性に期待したいと思っています。

花梨亭・鶴岡魚市場から松文映像文化施設計画へ

公益文科大石田教授のケースメソッドによる討議は、当事者が最後に登場するなどのサプライズもあり、大変知的な刺激にみちたものでした。石田先生は、同じ起業家事例をケースにお医者さんグループでも討議をしたそうですがJUDIの建築家・都市計画家グループのほうが肯定的な意見が多かったと印象を語っています。同じ専門職とはいえ、お医者さんは人の困った姿を見る職業ですし、私たちは今から新しい投資をしたり建築しようという前向きな人たちを相手にする職業です。その違いが出ていのでしょうか。

その夜は花梨亭で地元の食材とお酒を楽しみました。JUDIの皆さんが本当にお酒をよくのみ、よくしゃべるといふことにいままさながら圧倒されました。



写真1 花梨亭外観

会場となった花梨亭は下級武士の住まいを改装して出来たもので、地元出身の篤志家の金銭的なサポートをベースに、趣旨に賛同するボランティアによって運営されています。鶴岡にはこのような江戸時代以降の建築や町割がそっくり残っています。

翌日のJUDI賞の会場になった鶴岡魚市場もそのような建築のひとつです。ここは明治時代には若木座という芝居小屋があったところで、その歴史を私たちの研究室の学生が発掘しています。現在残るクイーントラス（対束）構造の小屋組みが当時のものかどうか、今後調べていくつもりです。クイーンポストトラスの小屋組みは芝居小屋のみならず明治以来多く用いられたものですが、ここ鶴岡にはたくさん残っています。

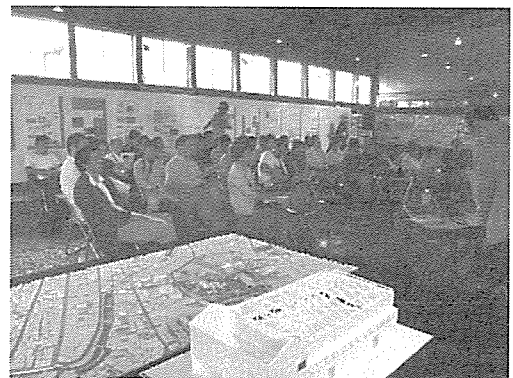


写真2 鶴岡魚市場での会議風景

そうしたもののひとつが松文産業です。これは昭和初期につくられた絹織物の工場ですが、郊外移転のため不要になったものを株)まちづくり鶴岡が買い入れ、映画館や貸しホールを中心とする地域文化施設に再生しようとしています。この工場にはキングポストとクイーンポストの両方の小屋組みが残っており、近代産業遺産としても貴重なものです。

このような建築空間は、それ自身が人々の記憶の媒体となるもので、都市の記憶そのものであるといっても良いと思います。先述したパネリストの國井頭取はこの記憶を人々と共有しながら、そこに人々が集う施設を発想しました。

私も建築の設計者としてその実現に協力しています。

大山・羽黒から学ぶこと

最終最終日は二つの地区のエクスカージョンでした。ここでは鶴岡市の早坂さんたちがまとめに苦勞するほどの多くの意見が出されたと聴いています。報告集の出来上がりが楽しみです。

私たちの研究室ではストック活用型まちづくりの一環として歴史的建築物をまちづくり資産として活用する方法の構築に取り組んでいます。この二つの町は多くのことを私たちに教えてくれます。

大山は、街並みが酒造り文化の表出であることを、また羽黒の街並みは羽黒修験道の宗教的な文化が街並みを読み解くコードであることを教えてくれます。私たちは、都市環境のデザインに関わるものとして最終的には

フィジカルな思考をするものですが、フィジカルな現象の背後にこれだけ深いものが隠れているということを知らないといけないということを学ばされたのがこの二つの町です。

最後に

エクスカージョンの後、市役所で全体の総括をしましたが、JUDIの皆さんが形態の背後にあるもの文化的な要素に大変強い関心を持ちまた理解のための知識が豊富なことに、花梨亭での飲みっぷり以上に感心しました。今回知り合ったJUDIメンバーからこれからも多くのことが学べるのではないかと期待をしています。JUDIの一員であることを大変誇りに思う3日間でした。

繰り返しになりますが、本当に皆様お世話になりました。ありがとうございました。



写真3 大山、造り酒屋の街並み

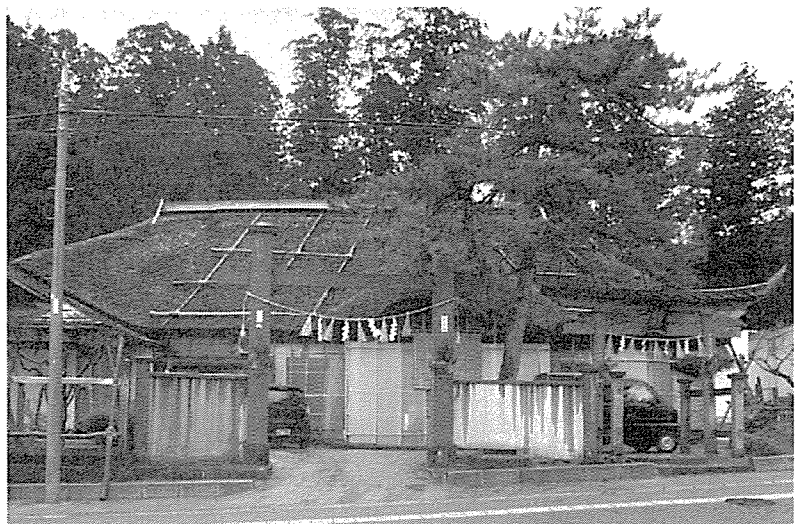


写真4 羽黒、宿坊の街並み

「まちづくり会議 in 鶴岡」 発表会+JUDI 賞 報告

松本 篤

MATSUMOTO ATSUSHI

愛知産業大学

JUDI 研修委員長

よくまちづくりの現場では、地元のまちのひと(土の人)と、外部から来る専門家(風の人)との共発的な協働により、望ましい環境(土+風=風土)が形成されると言われる。今回の「まちづくり会議 in 鶴岡」に参加した「風の人」、都市環境デザイン会議(JUDI)のメンバーは、都市、建築、土木、ランドスケープ、色彩、音、教育などとても多くの分野に及ぶ。また、地元キャンパスを置く大学を介することで、「土の人」も特定の地域にとどまらず、行政や建築士会などを含め鶴岡を広く網羅する方々の参加を得た。こうした、いずれもが分野横断的な「風の人」と「土の人」との出会いにはなかなか類を見ない。その一番の現場が、2日目(9月14日)に、現役の魚市場を会場に、8時間に及んで繰り広げられた「発表会 in 鶴岡市民+JUDI 賞選考」であろう。

木造のトラス架構が印象的な、かつての芝居小屋でもある魚市場の土間に椅子を並べ、発表会は、朝の引き締まった空気の中で始まった。進行役の机や発表者の演台は、学生が魚の箱など有り合わせの材料をたくみに工夫した。天候に恵まれた、まちを一巡りするまち歩きをはさみ、さまざまな意欲的取組みの発表が続いた。それらを手がかりに、地域の多くの問題が、予定をはるかに越え夕日に包まれた影が長く延びる時間まで、楽しく真剣に議論された。

その詳細な記録は別途まとめられる報告書を参照されたい(発表会レジュメは JUDI ホームページに掲載予定です)。

JUDI としては、総会と日程を切り離し、現地に出かけての発表会は初めて試みであったが、地元の幅広い協力を得られたこともあり、専門家集団がどのように地域と連携していくかについて具体的な示唆を得た貴重な機会となった。

<発表、まち歩きの要約>

● 美しい都市ランキング

JUDI 高見公雄

鶴岡市は140~160点と、比較的高ランキングである。

● 山形県鶴岡市の短中期滞在住宅「旅の家 皓鶴亭」の取り組み

山形県鶴岡市 NPO 鶴岡城下町トラスト 早坂 進

鶴岡市の、中心市街地の空き家を活用した、短期滞在型施設の報告。

● 鶴岡市内まち歩き

中心市街地と周縁部を、施設見学を含め約2時間半めぐった。市の用意した町並みチェックシートに、JUDI 側からの提案で色彩や音のチェックもあわせて行った。

● 夕張フィールドワーク&都市再生シンポジウム

JUDI 柳田 良造 他

JUDI 公募プロジェクト シュリンキングシティについての継続的な研究。

● 街路空間のデザイン検証—福井地域を事例に—

JUDI 川上洋司 他

JUDI 公募プロジェクト 高浜町、大野町、福井駅前を事例に街路空間とまちづくりの関係を検証。

● 地域歴史資産を活用した中心市街地活性化の試み 2007 内川再発見プロジェクト I

—その目的と効果—

東北公益文科大学大学院 村山 智昭

魚市場前の内川、三雪橋の歴史性を生かした中心市街地の活性化。

● 内川再発見プロジェクト I・ライティングプロジェクト

風景を批評する橋脚ライティング

元東北公益文科大学大学院 高谷研究室 学外研究員 花沢 淳

三雪橋の橋脚ライティングによる景観整備へのメッセージ。

● 「内川再発見プロジェクト II~明治ノ芝居小屋カラ~」活動報告

● 学院の社会連携—内川再発見プロジェクト I、IIを通して—

東北公益文科大学大学院 國井 美保

鶴岡市にとっての内川の大切さを再発見する、大学と地元が連携しての様々なプロジェクト報告、及び明治の芝居小屋であった魚市場再活用の提案。

以上の発表のうち、出席者の投票をもとにした JUDI 代表幹事の協議により、『山形県鶴岡市の短中期滞在住宅「旅の家 皓鶴亭」の取り組み』と、一連の『内川再発見プロジェクト』が JUDI 賞、『夕張フィールドワーク&都市再生シンポジウム』が JUDI 奨励賞を受賞した。

「まちづくり会議 in 鶴岡」に参加して

松村 みち子

MATSUMURA MICHIKO
タウンクリエイター
JUDI 広報副委員長

1 鶴岡キャンパス

JUDI（都市環境デザイン会議）と、東北公益文科大学公益総合研究所との共同企画により、「まちづくり会議 in 鶴岡 一地方都市からまちの再生を考える一」が、山形県鶴岡市において開催され、参加した。公益総合研究所は鶴岡・庄内をフィールドに、地方都市の再生の問題に学際的・総合的に取り組んでいる組織である。開催日は2008年9月13日（土）～9月15日（月）の3日間であった。

山形市には何度か行っている私であるが鶴岡市は初めて。鶴岡までの行き方について調べてみると、航空機なら羽田空港～庄内空港（1時間）～鶴岡（リムジンバスで30分）。新幹線利用だと3通りあり、①上越新幹線で新潟（1時間40分）～羽越本線の特急（1時間50分）、②東北新幹線で仙台（1時間40分）～高速バス（2時間20分）、③山形新幹線で山形（3時間）～高速バス（2時間）、他にも高速夜行バスという手もある。空路が一番速く楽であるが、今回は仙台から鶴岡の会場である東北公益文科大学大学院（鶴岡市馬場町）まで貸切バスがチャーターされたので、往きはそちらを申し込んだ。

集合場所の仙台駅東口バスターミナルからは25名ほどが乗車。車内にておおよそのスケジュールの説明があり、マイクを回しての自己紹介等で、イベントへの期待が高まった。

大学前でバスを降りると、目に入ってきたのはお堀に浮かぶようにたたずんでいるキャンパスの建物だった（写真1）。キャンパス敷地は鶴岡公園に隣接しており、一帯は歴史的なエリアである。建物は高さが低く押さえられ、開放的な水辺空間が創出されている。このお堀は新百間堀（しんひゃっけんぼり）といい、鶴ヶ岡城跡の百間堀

を再現したビオトープになっているという。当時の堀は鶴ヶ岡城本丸、二の丸を囲む形で残されている。

今回のまちづくり会議は、まちづくり会議実行委員会（東北公益文科大学、山形県庄内総合支庁、庄内開発協議会）、JUDI、鶴岡市の主催であり、山形新聞社、株式会社まちづくり鶴岡、山形県建築士会鶴岡田川支部が共催した。

主なスケジュールは、1日めの9月13日（土）は、第1部が基調講演と討議、第2部がケース討議で、会場はどちらも東北公益文科大学大学院ホールであった。第2部は予定では鳥居町花梨亭に移動し開催となっていたのだが、30名の定員を上回る申し込みがあったことと、時間も押していたため、急きよ第1部と同じ会場で開催されることになった。

基調講演の前に、黒田昌裕東北公益文科大学学長、富塚陽一鶴岡市長、柴田隆山形新聞社庄内総支社長が歓迎の挨拶をされた。挨拶で知ったのだが、東北公益文科大学は設立8年目（2001年設置）と、まだ歴史は浅い。公設民営方式をとっていて、公益をテーマに研究・教育を行っている大学は全国で唯一とのことである。

基調講演では、JUDIの土田旭さん（都市環境研究所代表）が「地方都市の再生と都市環境デザインー空間の質を問うまちづくりとは一」と題し、スライドを用いながら、明治半ばまで日本海側が日本の表であったこと、城下町には城下町の、港町には港町の、宿場町には宿場町としてのしつらえ（構え・デザイン）があったこと、その地域に一番合った生活様式を確立していけば良いということを分かりやすく話された。

続いての「社会的企業と地方再生」をテーマとした討議では、①事例報告と②パネルディスカッションが行われた。

①事例報告：株式会社まちづくり鶴岡の菅隆さんによる「社会的目的をもつ民間企業による都市再生の試み」

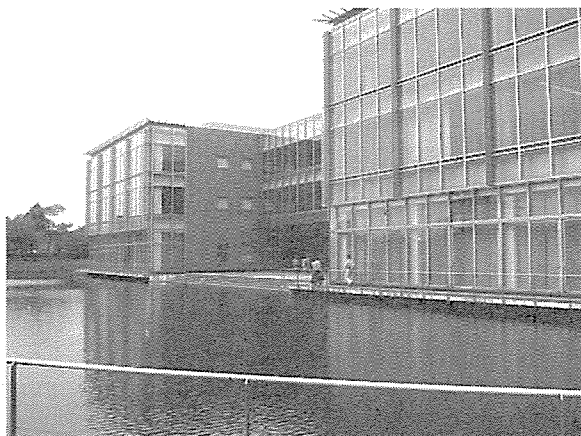


写真1 大学キャンパス

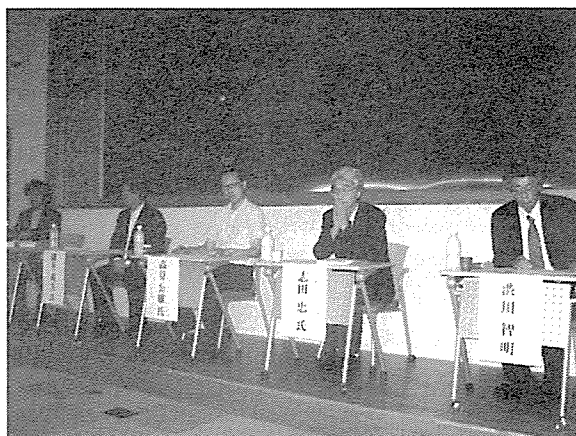


写真2 パネルディスカッション

②パネルディスカッション（写真2）：

左よりコーディネーターの高谷時彦さん（東北公益文科大学教授）、パネリストの國井英夫さん（（株）庄内銀行代表執行役頭取）、高見公雄さん（日本都市総合研究所代表）、志田忠さん（鶴岡市建設部長）、渋川智明さん（東北公益文科大学教授）

休憩をはさみ開かれた第2部は、石田英夫東北公益文科大学教授によるケース討論であった。ケース（実例）について参加者が自由に発言して討論を深めるというもので、こういうスタイルの教授法を「ケースメソッド」という。アメリカのロースクールなどの大学院で主に用いられている教授方法である。実践的な判断力を養うことを目的としており、教授は意見や回答を一切言わず、参加者が討議を通じて自分の意見を形成していく。今回取り上げた実例は地元企業の株式会社ウエノで、「庄内地方企業の技術開発と生産の国内回帰」について討論した。後半、実は会場内に株式会社ウエノの代表取締役社長上野 隆一さんが最初から同席していたというサプライズな紹介があり、参加者はより詳しく同社の経営方針を知ることができた。同社は主に「雑音防止用コイル」（ノイズフィルターコイル）の製造・販売をしており、特にリング形状のコイル（トロイダルコイル）の生産高は日本のトップクラス（2004年度は日本一）の企業ということである。

第1部の参加者は117名（内訳はJUDI 33名、一般 25名、庄内銀行 36名、鶴岡市 9名、山形県 10名、高谷研 4名）、第2部の参加者は48名（JUDI 32名、一般 9名、鶴岡市 2名、高谷研 5名）であった。

第1部終了後には花梨亭にて食事会があり、40名（JUDI 30名、一般 6名、高谷研 4名）が参加した。

2 JUDI 発表会とまち歩き

2日めの9月14日（日）は、鶴岡魚市場にて「JUDI 発表会 in 鶴岡市民」（JUDI 研修委員会企画）が開かれ、JUDI 発表会、まち歩きそして JUDI 賞選考・発表という内容であった。

魚市場の場所には明治期に若木座という芝居小屋があったとされる。魚市場の建物の天井部分は木造の木組みになっていて、若木座の建物をそのまま活用しているのではないかと推察されている。

まち歩きでは、庄内藩14万石の城下町だった面影がそこかしこに残されていることを発見した。中心部には庄内藩校致道館（国指定史跡）、大宝館、致道博物館、鶴岡カトリック教会天主堂（国指定重要文化財）など歴史的建造物が集中している。藤沢周平の小説や映画化された作品のロケ地も市内各所に点在し、観光資源に恵まれていることを感じた。

2日めの取り組み詳細については研修委員長の松本篤さん（愛知産業大学教授）の報告を参照されたい。

JUDI 発表会と現地でのまち歩きという組み合わせは、JUDI と地域の連携を深めるきっかけとなる良い試みであったと思う。参加者は39名（JUDI 33名、一般 4名、鶴岡市 2名）であった。

3 エクスカーション

3日めの9月15日（月・祝日）は、エクスカーション。エクスカーションとはよく知られているように、案内人の解説に耳を傾けながら地域を歩き、自然や歴史、文化などの価値を再発見する共同のフィールド調査（まち並み検証）のことである。今回のエクスカーションは、歴史的建造物と調和した町並みづくりを目標に、鶴岡市都市計画課と東北公益文科大学高谷研究室の企画担当により実施された。鶴岡市が「地方の元気再生事業」として取り組む「つるおか森のキャンパス元気プロジェクト」の一環でもある。

大山地区と羽黒地区の2コースが用意されていて、参加者は2班に分かれることになった。

1班は「大山の酒蔵と天領家並み」コース。主な見学先は、出羽ノ雪酒造資料館、上本町の家並み、富士酒造（建物内見学）、馬町の農家屋敷である。

2班は「羽黒修験の手向（とうげ）宿坊街」コース。主な見学先は、羽黒手向池ノ坊、桜小路宿坊街、羽黒山史跡、随神門前通りである。

鶴岡市役所の手配によるマイクロバスに乗り、それぞれの地域に移動し町並みを評価する。評価の仕方は次の2通りである。

①「まちなみチェックシート」：市役所に戻ってから簡単なチェックシートの各項目に評価点をつける（無記名）。後日「ポジショニングマップ」の作成に活用する。

②「まち歩きメモ」：まち歩きしているとき、気づいたことをポストイットに自由に書き込む（無記名）。後日「KJ法」での整理に活用する。

4 大山地区の視察報告

私が参加したのは1班の大山コースである。酒蔵で試飲もできるというのが理由の一つ。

大山自治会の渡部修吉さんと東北公益文科大学大学院生で大山まちなみに学会の國井美保さんが案内してくださる。

大山は明治期までおおむね天領であった地で、説明によると江戸時代には40軒の酒屋があった。灘と同じように移出用の酒をつくる酒造産業の町として発展してきた。

最初に訪問した「出羽ノ雪酒造資料館」では江戸時代からの酒造り方式や道具類などが展示され、興味深く見学した。写真3は昔の帳場風景を再現したもの。セツ玉そろばんや大福帳なども並べられている。写真4は利き酒コーナーでの試飲風景。

富士酒造(写真5)の母屋部分は1904年(明治37年)の建築とのことだが、美しく維持され風格が漂っている。富士酒造の加藤家は加藤清正公の嫡男忠廣公の流れをくむ家系で、創業は1778年(安永7年)。230年という歴史を持つ蔵元だ。12代目で取締役会長の加藤有倫さんが出迎えてくださった。

母屋には南と北に坪と称する庭園が配置されている。この庭園は眺めを楽しむほかに、夏の通風、冬の雪下ろしの空間という役割も担っていた。(図1 母屋の平面図参照)

中門は本来は若夫婦の居室に使うのが目的の部屋である。上座敷・下座敷は上客の接客や振る舞いなどに使用される。祭りなどの際は通りに面した出格子は取り外され、行列の見物席にもなった。上茶の間は主人の常駐の場であり、日常の接客の場である。下茶の間はかつては家族の食事の場であった。納戸は本来は家長夫妻の寝間であり、蔵の鍵ほか重要品の置き場でもあった。(参考文献:加藤寛二氏「酒造りと家」)

富士酒造から少し先が馬町で、町並みには農家住宅が残っている。築後200年は経過していると思われる茅葺きの農家住宅や、茅葺きに屋根をかけている珍しい農家住宅を見せていただいた。普段は公開していないので、屋敷内に入らせていただける機会は滅多にないそうである。関係者のご尽力のおかげである。

3日間とも好転に恵まれ、中身の濃い「まちづくり会議 in 鶴岡」となった。

地元の関係機関、大学などの関係者、そしてJUDI会員の皆様のご協力、ご尽力に心より御礼申し上げる次第である。



写真4 利き酒コーナー

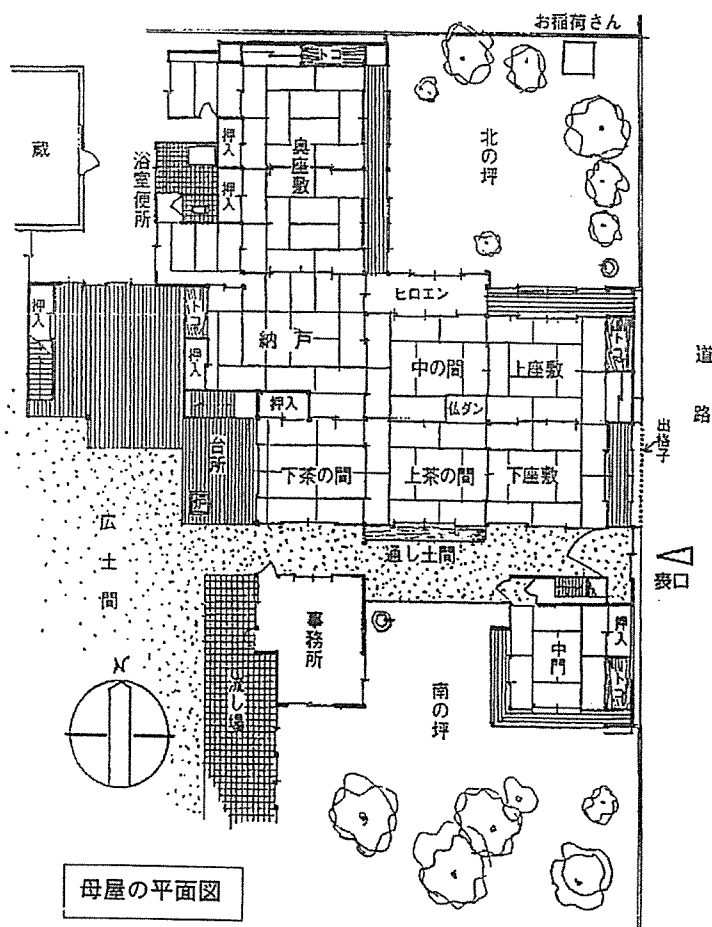


図1 母屋の平面図
(配布資料より引用)

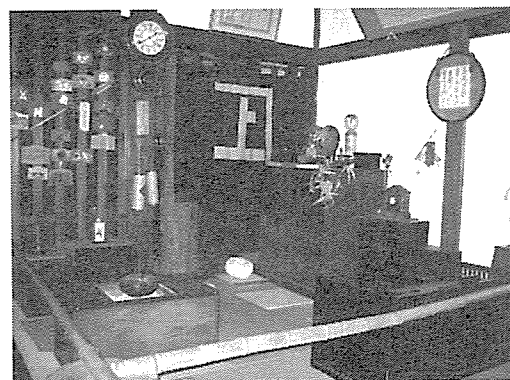


写真3 昔の帳場風景



写真5 富士酒造

全体の紹介

(学生からの取組

報告)

上野 直也

UENO NAOYA

東北公益文科大学大学院

9月13日～15日の3日間、鶴岡市で開催され、多数の関係者、一般市民が参加しました会議の概要を簡単にご紹介します。

<9月13日 第1日目>

当大学院ホールにて2部構成で開催しました。

第I部では、都市計画家で都市環境研究所代表である土田旭氏が基調講演を行い、まちづくりにおける景観のありかたについて、日本海側の地域を中心に事例写真を紹介しながら、これからは他地域のまちづくりを真似するのではなく、日本海側の独自の風土と個性を活かし、調和したまちづくりをデザインし、追及する必要がある、と強調しました。

その後討議に移り、㈱まちづくり鶴岡の部長である菅隆氏からまちづくり鶴岡の背景や取り組みの事例報告の後に、当大学院の教授を含めパネリスト5名を迎え、ディスカッションを行いました。

その中では、自主的にまちづくりを担う趣旨で設立されたまちづくり鶴岡の取り組む活動を、イギリスの社会的企業と比較しながら、その可能性について論じました。

最後には、会議参加者からの質問や意見交換の時間を設け、市のまちづくりに関すること、㈱まちづくり鶴岡と他県にある同様の組織との違いに関する事など多くの質問と意見が出ました。

第II部では、当大学院の石田英夫教授より「ケース討議」を実施し、討議では、参加者から多くの意見が出され、最後にはウエノの社長である上野隆一氏も参加しての意見交換に発展し、大きな盛り上がりを見せました。

<9月14日 第2日目>

第2日目は、今年の「内川再発見プロジェクトII」でも使用した、馬場町にある鶴岡水産物地方卸売市場（魚市場）に場所を移し、JUDI 発表会とまち歩きなどを行いました。

発表会では、JUDI 側より3つの団体、地元は2つの団体から各地域におけるまちづくりの取り組みを発表し、発表後は JUDI 会員が選ぶ「JUDI 賞」の投票が行われ、その中で高谷研究室の発表が光栄にも受賞しました。

また、発表会の間には馬場町周辺の歴史的建造物等を巡る「まち歩き」を行いました。まち歩きの際には、鶴岡市のまちで気づいた点や改善したほうがよい点などを付箋に記入する作業もお願いし、歩きながらの作業となりましたが、会員の皆様からは熱心に取り

組んでいただき、100枚を超える多くの意見を記入、提出してもらいました。

最後は参加者と意見交換の時間が設けられ、鶴岡市の景観に関すること、まちづくり活動における社会連携のあり方、資金等の面から継続性で行うことの難しさ、大学の果たすべき役割、連携などについて多くの意見が出され、予定時間をオーバーするほど白熱した意見交換を行いました。

<9月15日 第3日目>

最終日である3日目は、地元自治会等の住民の方々からの協力のもと、①酒造文化を伝える天領大山の町並みと②羽黒地区の手向宿坊街の町並みの2グループに分かれ、「エクスカーション」を行いました。JUDI 会員は鶴岡市に来るのが初めてという方が多く、普段はなかなか観る機会がないこともあり、今も残されている歴史あるまちなみを、非常に関心を持って観察し、満足した様子でした。

2日目の JUDI 発表会では「美しい都市ランキング」が発表され、鶴岡市では全6段階の評価のうち、上から2番目に高いカテゴリーに属し、高評価を受けていることをこの度の会議で初めて知りました。普段、市に住んでいるものからすると、意識する機会が少ないですが、専門家からの高い評価を受けていることは、大変嬉しいことです。

また、鶴岡市の条例で建築物の高さ制限を設けていることに対して、画期的であるとの高評価をいただいた一方で、今後はそれを活かして、出羽三山などの景観と調和したまちづくりの工夫が必要との意見がありました。その他にも、楽しく歩ける道が少ない、夜の街路照明が暗いなどの指摘、鶴岡駅前周辺の景観などについての意見や今後の提案もありました。

前述のとおり、JUDI 会員からは「まち歩き」で鶴岡市のよいところ、改善した方がよいところなどについて、たくさんの意見をいただき、そのご意見をまとめるだけでも、今後まちづくりにおける重要なヒント、テキストになると思います。会議後も、気づいた点についてメールを下さるなど、専門家である会員の皆様から本当に熱心に鶴岡市を見てもらったのだと感謝しています。

最後になりますが、この会議を通じてご協力いただいた関係機関の方々にはこの場を借りまして深く御礼申し上げます。

2 日目の日程

＜JUDI 発表会＞

- ・ JUDI 発表①
発表者：高見公雄氏
『美しい都市ランキング』
 - ・ JUDI 発表② ※
発表者：柳田良造氏
『夕張フィールドワーク & 都市再生シンポジウム』
 - ・ JUDI 発表③
発表者：川上洋司氏
『街路空間のデザイン検証
ー福井地域を事例にー』
 - ・ 地元発表①
発表者：早坂進氏 ※
『城下町トラストのまちづくり活動』
 - ・ 地元発表② ※
発表者：國井美保、村山智昭、
花沢淳（元公益文科大学高谷研究室学
外研究院）
『内川再発見プロジェクト』
- ※ は JUDI 賞受賞

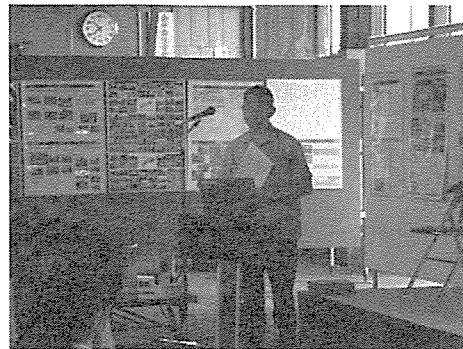


写真
発表を行う NPO 鶴岡城下町
トラスト 事業調整事務局 早坂進 氏



写真
発表を行う院生村山智昭

＜まち歩き＞

馬場町周辺を約 2 時間フィールドワーク
丙申堂～致道博物館～七日町観音堂～
鶴岡カトリック教会天主堂

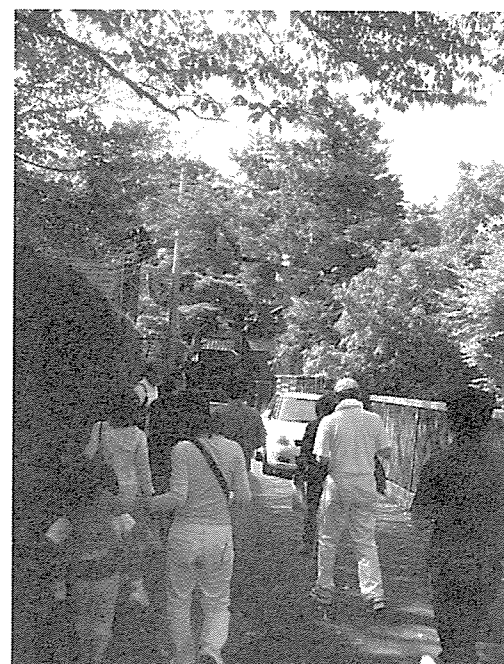


写真
エクスカーシヨンの様子

地域に根差した 都市をデザイン



パネルディスカッションなどが展開された
「まちづくり会議in鶴岡」
＝鶴岡市・東北公益文科大学院ホール

なを宣傳し、山形新聞社が共催した。同研究所文部科学省の立大学術研究所文化振興事業の助成で「公益ジャーナル」の研究進めていく。JUDYは都府県間のデパートに開拓する研究者や研究者を全国組織、鶴岡、庄内のまづくりの仕方、とり及、視野から探つて企画した。

初日は、同大学座長キールを会場にシンポジウムを開いた。同の黒田昌雄座長、富田塚陽、鶴岡市長、栗山山形新聞社内総文員があいさ

長が民間企業による都市再生
の事例報告を行った後、岡井
英夫荘内銀行頭取、岡大の池
田智明教授と五人が討論を繰
開。一日指すべき人口の規模
に定じた市街地の形成が大阪
に「東京などの都心部の発
別化を導く」見慣れた風景の
中から価値を見出した」とい
などの意見が出た。地元の食

シンボム 地方から再生考える

識in鶴岡始まる

UDUの共同企画「まちづくり会
n鶴岡」が、つづきの再生を
n鶴岡、鶴岡市で始まった。
が土曜、鶴岡市で始まった。
日まで1日間の日程で、地方都市の
いかにきつくりなどを考える

東北公英科大公益総合研究所（大島
美恵子所長）と都市環境デザイン（金藤了

[illegible]

9月14日山形新聞記事

事務局より

1. 新会員の紹介

2008年9月～12月の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

12月31日現在の会員数は、421名です。

正会員氏名	勤 務 先 (ﾌﾞﾛｯｸ)
岩永 秀樹	(株)オオバ九州支店 (九州)
櫻井 直樹	(株)ユージーン都市・デザイン研究所 (関東)
永松 栄	宮城大学 (東北)
昼田 真吾	黒崎播磨(株) (関東)
道地 慶子	石川工業高等専門学校 (北陸)
中井 二郎	(株)エイトコンサルタント関西支社 (関西)

2. 退会者 (2008年9～12月)

井上善朗、今井信博、小島令治、佐々木稔、沢木俊岡 (敬称略)

3. 住所変更等 (敬称略)

氏 名	変 更 内 容 (新)
上山 良子	(株)ランドスケープデザイン研究所 〒104-0054 東京都中央区勝どき6-3-2-2703 Tel. 03-5548-2808 FAX. 5548-2807
林 泰義	(株)計画技術研究所 〒153-0063 東京都目黒区目黒3-9-3 Tel. 03-5773-1025 FAX. 5773-1028
八木 健一	八木造景研究室 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-28-8-302
山名 清郷	(株)東京建設コンサルタント 〒170-0004 東京都豊島区北大塚1-15-6 Tel. 03-5980-2633 FAX. 5980-2606

広報委員会

白濱 力	土田 旭
近田 玲子	加茂みどり
菅 孝能	岸田 文夫
中嶋 猛夫	松山 茂
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 愼悟
島 博司	横山 裕
作山 康	服部 圭郎